

現地からの声

ハイチ連絡調整要員 1等陸尉 和田一輝

1 はじめに

1月13日（日本時間）にハイチ共和国で発生した震災がきっかけとなった同国への自衛隊派遣。それに伴い、私も2月にハイチ連絡調整要員として派遣され、早5ヶ月が経ちました。私にとって初めての海外勤務・生活となったこのハイチ共和国で、数多くのことを学び、そして体験することができました。今回は、その私の経験とハイチ共和国について紹介します。

2 現地到着

いまだ民航機の離発着がなされていないポルトープランス国際空港に、自衛隊輸送機C-130で到着しました。後部のハッチが開くとともに、むわっとする熱気が身体を包み、冬仕様になっていた私の体から一気に汗が吹き出てきました。「暑い」これが私のハイチに対する第一印象でした。

移動の車中から見えるのは、数多くの黒人と、道を塞ぐ大量の瓦礫と、そこら中に散らばるゴミばかりの光景・・・

私の海外に対する淡い期待は一瞬で無くなるとともに、この国が大震災に遭ったこと、そして、その復興支援活動のために来たのだという現実を突きつけられたような気がしてなりませんでした。



現地に到着するC-130

3 ポルトープランス

大半の人が1日1ドル以下で生活すると言われているハイチ共和国。その首都であるポルトープランスには200万人もの住民が生活をしています。道路沿いには数多くの露天商が立ち並び、多くの人と車両が行き交い、活気が溢れています。その様子を見る限り、あまり「貧困」というものを意識しません。特に、高台にある地区は高級住宅街やホテルが多くあり、洒落た店舗も軒を連ねています。

しかしながら、郊外に出れば、海岸沿いの低い土地の一角は大規模なスラム街を形成しており、その地域では、人々がトタン板と木で作った粗末な掘立小屋で寝起きをし、ドブの匂いが立ち込めるような劣悪な衛生環境の中で生活しています。

そこには西半球最貧国、そして、1日1ドル以下の生活という現実がありました。



ポルトープランス市内の様子

4 震災被害

この1月の大震災での死者は22万人以上、負傷者は約31万人とされています。この大震災により、数多くの家屋が倒壊し、その瓦礫が道路を塞ぎ、電柱を押し倒し、排水路を埋め、インフラは壊滅的な状況になりました。そのため、いまだに停電や断水が断続的に続いているという有様です。この震災復興のため、数多くの支援金が国際社会から寄せられ、現地においても多くのNGO職員が医療支援や学校再建、仮設住宅建設等のために働いています。

私はこうした様々な国際機関やNGO等の職員たちと情報交換をする中で、国際貢献には色々な方法や形態があることを知りました。また、日本からも日本赤十字、JICA、NGO等の組織が現地で活動をしており、多くの日本人がハイチの復興に貢献しています。



震災被害の様子



現地で活動する日本赤十字

5 避難民キャンプ

震災で家を失った住民が避難民となり、公園やゴルフ場、広場には、その避難民が建てたテントがぎっしり立ち並んでいます。そして、避難民の大半はそのテントと防水シート2枚で生活しています。そのような「避難民キャンプ」と呼ばれる箇所が無数に存在し、中には2万人以上になっている大キャンプも複数存在します。その避難民の総数は150万人以上とも言われています。

私は、その避難民キャンプに何度も足を運び被災者の生活の状況を自らの目で見つぶさに見て回りました。悲壮感漂う中で生活をしているのではないか、という私の予想を裏切り、被災者の多くが私を見るなり、「ジャポネ（日本人）、ジャポネ（日本人）」と笑顔で声をかけ、子供たちは集まってきます。そこで逞しく生きる人々の笑顔、子供たちの澄んだ瞳を見て、日本人の忘れかけている何かを教えられたような気がしました。



テントが立ち並ぶ避難民キャンプ



群がる子供たち

6 連絡調整事務所での勤務

連絡調整事務所はポルトープランス市内のホテルの1室に開設され、5名で勤務しています。しかし、断水や停電が頻発し、通信環境も悪いため、勤務環境としては恵まれているとは言えない状態です。業務としては、現地に派遣された自衛隊、大使館やPKO事務局との連絡調整、治安等の情報収集があり、多方面にわたり活動することのできる自由度の高いものです。ちなみに、ローカルスタッフ4名も雇用し、彼らともコミュニケーションを図りつつ明るい雰囲気

の中で勤務しています。ちなみにローカルスタッフは、勤勉に働く頼もしい仲間です。



陽気なローカルスタッフ



現地住民のラジオ情報収集

7 ハイチ派遣国際救援隊（自衛隊）

ハイチでは、2月から自衛官約350名がPKO活動を継続しています。日中は40℃を越える猛暑の中で黙々と汗を流しながら、ハイチ国民のために働いています。

主要な活動内容は、瓦礫除去、道路補修、施設解体等であり、その活動成果は国際機関からも評価され、現地メディアでも報道されています。そして、現地の住民とも「文化交流」という形で親交を深めています。

そんな隊員たちに、ここでの楽しみを尋ねると、「日本にいる家族との電話」「食事」「入浴」という回答が大半でした。



現地での自衛隊の活動の様子

8 最後に

まずは、このハイチ復興支援活動という貴重な経験ができたことに感謝したいと思います。数多くの外国人に出会い、会話をし、触れ合えたことも私の狭い視野を広げる機会となりました。そして何よりも、「日本」が世界から一目置かれていること、多くの人に好意を持たれていることも知ることができ、これは、諸先輩の方々が尽力されてきた賜物なのだと思います。

このハイチという国は政治、経済、農業、環境、どれをとっても問題が山積の国であり、未来は前途多難のように感じます。しかし、この国で生きる人々は明るく、音楽とサッカーをこよなく愛する社交的な国民ばかりです。ハイチという国が、その国民の前向きさを生かし、国際社会の支援を受けつつ、少しずつでも良い方向に向かうことを祈念しています。



平成22年7月17日 ハイチにて